

飯山市埋蔵文化財調査報告 第73集

北竜湖遺跡

HOKURYUKO SITE



2009・12

飯山市教育委員会

例　言

- 1 本書は、平成 21（2009）年に実施した長野県飯山市瑞穂に所在する北竜湖遺跡調査報告書である。
- 2 調査は、長野県北信地方事務所が行う「平成 21 年度 県営中山間地総合整備事業 菜の花 2 期地区北竜湖工区」により、所在する北竜湖遺跡の記録保存を目的として実施したものである。
- 3 調査は、北信地方事務所長佐藤久夫と飯山市長石田正人との間で発掘調査委託契約が交わされ、飯山市教育委員会が直営で実施した（契約額 338,000 円）。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

| | | |
|-----|--------|---------------------------------|
| 事務局 | 土屋 稔 | 飯山市教育長 |
| | 村山 芳広 | 飯山市教育次長 |
| | 中原 美恵子 | 市教育委員会学習支援課長 |
| | 望月 静雄 | 市教育委員会学習支援課長補佐兼文化振興係長 |
| | 中村 徹 | 市教育委員会事務局主査（～平成 21 年 11 月 30 日） |

調査担当者 望月 静雄 市教育委員会事務局職員

調査員 丑山 直美 飯山市ふるさと館 学芸員

作業参加者 市村文昌・真島一男・古原年一

協力機関 小菅区（廣瀬光雄区長）・文化北竜館・北竜湖の館

- 5 発掘調査は調査員丑山直美が主体となって行い、報告書は望月静雄のほか飯山市ふるさと館藤沢和枝、山本伊都子が協力した。文責は望月にある。
- 6 確認調査の出土遺物・調査図面等は飯山市ふるさと館で保管している。

目 次

| | |
|-------------------|----|
| 例言 | |
| 目次 | |
| I 北竜湖遺跡調査の目的と経緯 | |
| 1 目的 | 1 |
| 2 経緯 | 1 |
| II 遺跡の環境 | |
| 1 自然的環境 | 2 |
| 2 北竜湖遺跡について | 3 |
| III 調査 | |
| 1 概要 | 6 |
| (1) A区 | 6 |
| (2) B区 | 6 |
| (3) C区 | 7 |
| 2 出土遺物 | 9 |
| III まとめ | 10 |
| 報告書妙録 | 10 |

I 北竜湖遺跡調査の目的と経緯

1 目的

長野県北信地方事務所は、地域の要望を受けて灌漑用水地である飯山市瑞穂に所在する北竜湖周辺において「県営中山間総合整備事業」を計画した。北竜湖の周辺には、周知の埋蔵文化財包蔵地「北竜湖遺跡」が存在することから、北信地方事務所と飯山市教育委員会協議の上、工事に先立つて記録保存としての発掘調査を実施することとなった。

2 経緯

平成 20 年

8 月 来年度以降の工事について、事業概要書が提出される。工事前に協議を行うこととする。

平成 21 年

6 月 県北信地方事務所から、北竜湖周辺で実施される工事について、埋蔵文化財の取扱いについて照会がある。

6 月 18 日 北信事務所長名で、「埋蔵文化財発掘の通知」が提出される。

6 月 23 日 飯山市教育委員会の意見書を付して県教育委員会に提出する。

7 月 1 日 県教育委員会教育長から、北信建設事務所長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、同時に飯山市にも、「記録作成のため発掘調査を実施」する旨の通知がある。

7 月 23 日 北信建設事務所長から飯山市長あて、見積書の提出について依頼がある。

7 月 31 日 飯山市教育長名で北信建設事務所長あて、見積書を提出する。

8 月 19 日 北信地方事務所長から飯山市長あて、発掘調査のに係る協議書が提出される。

8 月 21 日 北信建設事務所長と飯山市長との間で、「平成 21 年度 菜の花 2 期地区 北竜湖工区 北竜湖遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」契約を取り交わす。

9 月 4 日 発掘調査器材搬入等準備

9 月 8 日～10 日 発掘調査

9 月 16 日 埋蔵物発見届、埋蔵文化財保管証、発掘調査終了届をそれぞれ提出。

10 月 2 日 県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について」の提出がある。

12 月 22 日 すべての業務を完了する。

II 遺跡の環境

1 自然的環境

北竜湖遺跡は、長野県飯山市大字瑞穂に所在する。旧下高井郡瑞村で、昭和29年8月の町村合併により飯山市となった。

飯山盆地は、東西約6km、南北約15kmの紡錘形の小盆地である。盆地西縁は、黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.8m)等比較的低い関田山脈(東薬城丘陵)によって画されている。ここには越後に通ずるいくつかの峠道が知られている。一方、盆地東縁は毛無山(1649.8m)等三国山脈の支脈によって、また断層構造線に沿って急峻な山地で画されている。飯山市瑞穂地区は、盆地東縁の山麓および千曲川河岸に面した段丘・丘陵上に位置している。

北竜湖遺跡は毛無山の中腹、断層線に沿って形成された構造性の湖(飯山市誌自然編)である北竜湖岸周辺に位置する。標高は湖水線で約500mであり、盆地底との比高差は約200mを測る。北竜湖は現在灌漑用溜池として利用されており、かつては南側にあった早乙女池と北側の北竜池を併せて北竜湖としたという。そのため湖の周囲はかなり削土されている。また、特に湖の北半の周囲から旧石器～平安時代の遺物が多く採集されており、これまで多くの遺物が採集されている。



北竜湖遺跡(左松林が今回の調査対象地区)

2 北竜湖遺跡について

北竜湖遺跡は大正時代から知られている遺跡で、下高井郡誌（1922）にも掲載されている。ただし、正式な発掘調査はこれまでに行われたことなく、湖岸にて容易に採集される土器や石器により、旧石器時代から平安時代までほぼ連続して営まれた遺跡であることがわかっている。

また、昭和40年代の飯山北高校地歴部の丹念な遺物の表面採集により、下表のとおりおおよそa～iの9地点に濃密に分布し、また、地点ごとに多少の時代差もあることが判明している。

| 地 点 名 | 所 在 地 | 遺 構 ・ 遺 物 | 備 考 |
|----------|-----------------|------------------------|-----|
| 北竜湖 A 地点 | 旧売店前（ボート発着場南周辺） | 表裏繩文土器・押型文土器・尖頭器・石匙・石鏃 | |
| B 地点 | 苗圃（湖西丘陵地） | 繩文前期土器・石匙・凹石・石鏃・磨石 | |
| C 地点 | 水門付近 | 細石刃核 | |
| D 地点 | 弁天島東縁 | 繩文後期晚期土器・平安時代上飾器・須恵器 | |
| E 地点 | 弁天島北縁 | 片刃石斧 | |
| F 地点 | 湖東北縁 | 表裏繩文土器 弥生後期箱済式 | |
| G 地点 | 湖北縁 | 石鏃 | |
| H 地点 | 湖北西縁 | 表裏繩文土器 | |
| I 地点 | 文化学園テニスコート付近 | 押型文土器 | |

採集遺物について触れているのは、昭和55年に刊行された「新編瑞穂村誌」で、繩文草創期～繩文早期の主要な土器及び旧石器時代から繩文時代にかけての特徴的な石器が初めて掲載された。

なお、E地点において発見された片刃石斧は望月が昭和55年に雑誌「高井」において下記のとおり報告している。

「1 北竜湖遺跡は、飯山市大字宇都穂北竜湖周辺に所在する。飯山盆地の東北側を形成する毛無山（1640.98m）の中腹に位置し、標高は500m、盆地底との比高差は約200mである。その成因は野沢・北竜湖・往郷と続く断層構造線によるものとされ、昭和初期に灌漑用貯水池として拡張工事を行ない、南側に存在していた早乙女池を併せて現在の北竜湖が成立した。

北竜湖遺跡については、既に幾つかの文献で触れているが、飯山北高地歴部の分布調査によって明らかにされた部分が多い。それによれば、①遺物は湖周辺の広範囲に分布するが、部分的に粗密があり、便宜的にa～iの9地点に区分される。②おおまかではあるが、時期的に地点分布が異なる。③遺物は、先土器時代～奈良・平安時代の各期にわたる石器、土器が採集されており、断片的ではあるがほぼ連続的に営まれた痕跡を示している。

そして、何よりも北竜湖遺跡が重要と認識されたのは、先土器時代及び繩文時代草創期に係る遺物によってである。極めて特徴的な遺物が多い。本稿で紹介しようとする石器もそのひとつである。

2 ここに紹介する資料は、昭和47年飯山北高地歴部の現地調査に於いて、同行した松沢芳宏

氏がE地点で単独採集したものである。以下説明を加えたい。

現存長12.3cm、幅5.2cm、厚さ3.0cm。砂岩を素材として、前面が粗い剥離で調整されている。頭部はやや鋭い。両縁辺は平行せず、頭部に向って緩く収束する。正面は急斜剥離を施し、離面には平坦な剥離を施している。その結果、横断面は正三角形に近い形をとる。先端部、正面中央部の稜線付近から一回の打撃によって大きく破損しており、その後、稜線付近、離面先端部にそれぞれ調整が施されている。正面中央部からの加撃は意識的なものか偶発的なものか判断しがたいが、刃部再生を意図したとするには技法的には首肯できない。何れにしても、前述したように再加工が施されていることから、再使用を意図したことは明らかである。また、形態的には局部磨製の丸ノミ形石斧であった可能性も考えられるが、残念ながら知るすべはない。

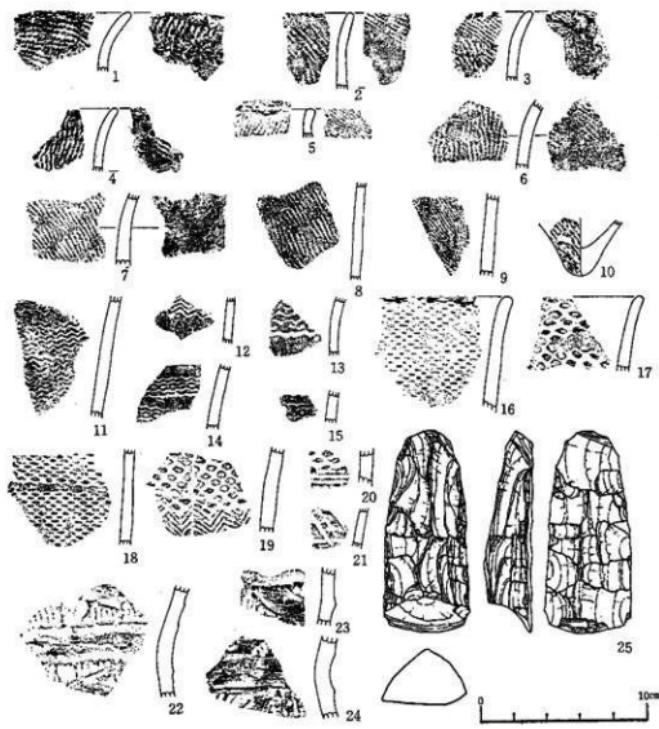
3 本例は、先土器時代終末から縄文時代草創期にかけて出現、消滅する石器で、片刃石斧と呼称されている。その源流は、東シベリアのウスティ・ベラヤ遺跡例等に求められるとして、ウスティ・ベルスキ期（中石器時代）の所産と考えられている。東北アジアではこれが新石器時代のセロボ期まで使用されるが、日本では縄文時代草創期初頭で姿を消してしまうのである。わが国における片刃石斧は、土器出現以前の先土器時代終末期（第1群・神子柴・長者久保遺跡等）のものと、土器を伴出す縄文時代草創期（第2群・田沢・小瀬ヶ沢遺跡等）のものとに大別される。森島氏は、2群をさらに細別され、第1群1期・神子柴→同群2期・唐沢→同群3期・長者久保→第2群4期・田沢→同群5期・小瀬ヶ沢→同群6期・日向洞穴に型式分類されたが、基本的には各遺跡に代表されるインダストリーの差に依っている。また、小田静夫氏等は先土器時代初期から存在する局部磨製石斧について、I～IIIの3タイプとa、b、cのサブタイプに分類した。ここで問題とするIII期の編年については、長者久保→神子柴と編年し、森島氏とは異なる見解を示した。しかし、時期的な変遷の根拠については言明されていない。

以上、片刃石斧の編年について触れてきたが、いまひとつ判然としていないのが現状である。

北竜湖遺跡の片刃石斧は単独採集であり、組成（インダストリー）は不明である。しかし、先土器時代終末及至縄文時代草創期の遺物としては、各地点より尖頭器、搔器、剥片石器、石鏃、縄形石匙、表裏施文の同転縄文系土器片等が採集されている。これら何れかの遺物と組成するものと考えてよいであろう。ただ、縄文時代草創期の片刃石斧に伴出する土器は、瓜形文系土器群を下限とするようであり、より後出とされる表裏施文の回転縄文系土器群と共存する可能性は少ないと想われる。

技法・形態は、青森県長者久保遺跡の局部磨製石斧（円ノミ）及び新潟県小瀬ヶ沢遺跡の打製片刃石斧の一部に類似する。前述したように神子柴遺跡例は森島・小田両氏の編年的位置に相違はあるものの、土器出現以前の段階であるという点では共通している。一方、小瀬ヶ沢遺跡例は土器を伴出し、縄文草創期初頭に編年的位置が確定している。近年、長者久保石器群に類似する遺跡より土器が共伴する事実も認められているが、これをもって結論するには短絡的であり、今後、より総合的な検討が必要とされる。したがって、本遺跡採集例の編年的位置については明確な判断を下せないが、より後出的な様相であると考えている。恐らく小瀬ヶ沢遺跡に近い年代が与えられるのではあるまいが、近い将来、北竜湖遺跡から当地方最古の土器片が検出される可能性は充分あると思われる。」

長い説明であるが、当時先土器（旧石器時代）末から縄文時代の幕開けにおける、この特徴的な石器は注目されており、現在でもその重要性は変わっていないのである。



北竜湖遺跡既出遺物(縮尺1:3)

今回の調査対象地は、A 地点及び C 地点にかかる部分で、松等が植えられベンチなども設置され、多くの人が池を眺めながら散策できる場所である。本地点から湖岸にかけては、かつての拡幅のため崖となっているが、湖水面下にかけて縄文時代の回転縄文系土器(表裏縄文)や押型文土器などが採集されている。また、水門付近では旧石器時代細石刃核が採集されているので、旧石器時代末から縄文時代初期にかけての地点と考えられる。

III 調査

1 概要

調査対象地は、湖岸に向かうコンクリート舗装による遊歩道を敷設するものである。ほとんど表土がないと判断されたため歩道部分の発掘調査を実施することになったものである。

なお、遊歩道に挟まれた中央に花壇設置があるが、現況では「北竜観音」像が建立されており、その周囲を花壇にする計画である。現状でもその周辺は破壊されていることが伺えたので調査対象から除外した。

調査区は、便宜的にA～Cの三地点に分けた。これは、道路幅が2mと狭く、また地形に合わせてカーブを描いているため、通常のグリットやトレーニングを設定しても不都合が生じると考えられたため、任意に設定して行った。なお、調査区は設定後、施行図面上に入れられるようにした。

(1) A区

水門の北側を通り湖面に向かう遊歩道の平坦な部分をA地点とした。礫を多く含み搅乱が著しく認められた。水門建設時に工事を行なったのではないかと考えられた。遺物・遺構とも確認できなかつた。



A区 全景



A区 調査状況

(2) B区

北側からA区に交差する区域である。この付近は、かつて松の植林が湖水に洗われてかなり弱つたために土を入れたといわれている場所で、包含層が残されているのか否かを確認する意味もあって調査した。その結果、約20cmの盛土が確認されたが、その下位はかなりはつきりした褐色土層であり、包含層が失われていたことが明らかとなった。遺構、遺物は認められなかった。



B区 調査状況



B区 盛土の状況

(3) C区

A・B区が合流して湖岸に下る地区である。部分的に黒色土が認められ、包含層が残されていると判断した地区である。調査の結果、部分的に包含層が残されていることが判明したが、遺構等は確認できなかった。ただし、土器等の遺物が散在的に検出されている。



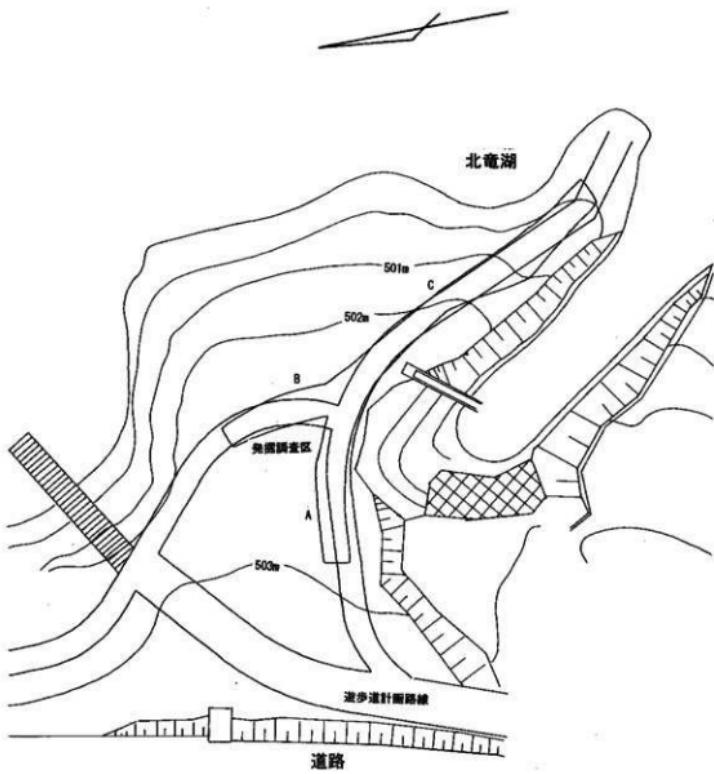
C区 調査前状況



C区 発掘状況



C区 発掘風景



免柵区(1:400)

2 出土遺物

今回の調査で検出された遺物は、土器片4点、剥片2点である。

土器の拓本1は縄文草創期から早期にかけて位置づけられている表裏縄文と呼称される土器外側のほか口縁内面にも縄文が施される回転縄文系土器である。2は縄文早期の押型文土器で、山形文が刻まれている。いずれも摩滅が著しいため、詳細については不明である。

石器は剥片2点である。安山岩製及び黒曜石製の縦長状剥片であるが、いずれも縁辺には使用と思われる小剥離痕が認められ、石器として利用された可能性がある。時期的には土器と同様に縄文時代草創期から早期に位置づけられるであろう。



出土遺物 上段左から 表裏縄文土器・押型文土器・無文土器・縄文土器 下段左から安山岩製剥片・黒曜石製剥片



表裏縄文土器・押型文土器拓影(2:3)

IIIまとめ

今回の調査は、遊歩道という小規模な調査であり、遺跡の破壊は最小限にとどめられた。調査区はかなり破壊された場所もあり造構等は確認できなかった。また、遺物も少數にとどまった。しかしながら、表裏縄文、押型文土器という縄文時代でも古い土器が発見されており、飯山市の縄文時代草創期・早期研究に欠かせない遺跡であることが改めて裏付けられた。今後とも研究していきたいと思う。

調査にあたっては、文化北竜館、北竜湖の館、小荷区に改めて御礼申し上げるとともに、作業に参加いただいた皆様にも厚く御礼申し上げる。

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------|--|-------|------|-------------------|----------|-------------------|--------|--|
| ふりがな | ほくりゅうこいせき | | | | | | | |
| 書名 | 北竜湖遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 飯山市埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第74集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 望月静雄 | | | | | | | |
| 編集機関 | 飯山市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 Tel0269(62)3111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成21年12月22日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | |
| 所有遺跡名 | 市町村 | 遺跡番号 | ° | ′ | | | | |
| 大音遺跡 | 長野県飯山市 | 20213 | 36° | 138° | 20090908 | 25 m ² | 緊急発掘調査 | |
| | 大字端穂 | 60 | 54' | 25' | ~ | | | |
| | 7777-1 | | 06" | 48" | 20090910 | | | |
| 所有遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 北竜湖 | 散布地 | 縄文 | なし | 表裏縄文土器片 押型文土器片 | | | | |

飯山市埋蔵文化財報告 第73集

北竜湖遺跡

平成21年12月22日 発行

編集 飯山市教育委員会 学習支援課 文化振興係

飯山市大字飯山1636番地1 飯山市公民館内

発行 飯山市教育委員会 長野県飯山市大字飯山1110-1

印刷 有限会社 足立印刷所